

景観調査と景観計画について

—一枚方市の「景観調査書」と「景観計画書」の分析— 住民等による「景観計画素案」のための基礎的研究 その2

榊原 和彦, 谷口 興紀, 川口 将武

On the Landscape Survey and the Landscape Planning
— The Analysis of Hirakata City's Two Documents of Landscape —
(Basic research for “a draft landscape plan” by local residents et al. Part 2)

SAKAKIBARA Kazuhiko, TANIGUCHI Okinori, KAWAGUCHI Masatake

Abstract

It is easy to initiate urban planning from landscapes of the city and to reach agreement if the landscapes following the urban planning are shown to residents. Regarding the term “landscape,” the visual takes priority in the urban planning. However in the landscape ecology, it is strongly connected with the particular region. This means that the landscape is not an abstracted, universal thing, but rather a reflection of that region, including the intrinsic “scenery in the mind”. We clarify that it differs from the thought process of the scientific method, which breaks the whole into elements and seeks the optimal from only relationships between those elements. As a case study, we analyze from the viewshed two documents: a landscape survey of Hirakata City and a landscape plan of Hirakata City.

(*) “a draft landscape plan” is quoted from the English translation of the Landscape Act (景観法, Act No. 110 of 2004) prepared by the Landscape Office of the Ministry of Land, Infrastructure and Transport.

Key words: landscape ecology, Gestalt inverse, natural scientific method, design method, GIS, Landscape Survey of Hirakata City, Landscape Planning of Hirakata City

1. はじめに

まちづくりは、既存のまちを、住民が見ることからはじめることが、取りかかりやすいという意味で、景観は、まちづくりの入り口である。また、まちづくり案が、景観図として見える化されるならば、景観は、まちづくりの出口でもある。まちづくり案は、文章より図表、表よりグラフ、平面図より3次元図、3次元図より模型で表現されるほうが見える化の程度が高くなる。景観という観点からみるならば、まちづくりは、住民の心の中の既存のまちのイメージの更新、つまり景観更新であり、そのイメージが外在化されたものが景観計画図（景観図案）である。

都市計画的景観概念では、視覚性が優先する。しかし、景観生態学を参照するならば景観は地域性が基盤となっており、地域における生活の反映であり、心に現れた景色を含んだ固有な事柄であり、普遍的、抽象的なものではないことを反省させる。この考えに則ると景観計画は、自然科学的な考え方、つまり既存の全体を要素に分けて、要素間の関係のみから最適なものを求めるという考え方とは異なる側面をもつことを意味する。このことにより枚方市の「景観調査書」と「景観計画書」とを比較分析すると、景観計画の取りかかりの作業である、枚方市全域を各地区に分けることの問題点が明らかになる。

この問題点を解消する方法としてGIS技術の可視領域（viewshed）を応用することが考えられることを将来的展望とする。

以下における〔 〕の中の番号は注の番号であり、引用原文の傍点を筆者が下線に変えている。使用するGISソフトは、ESRI社のものである。

2. 景観生態学における「景観」について

ドイツ語のLandshaftという用語が、わが国で1930年代に「景観」と訳されて定着していく過程で、辻村による「景観を目に映ずる景色の特徴と考えて差し支えない」「ここでは、地域の意味を含ませない」（辻村、1頁）〔1〕という規定が普及し、景観は、視知覚的認知に傾斜し、その段階にとどまっていると言われる（武内、2頁）〔2〕。武内によれば、

景観の地域性を保った学問領域は、現代では、景観生態学（ランドスケープエコロジー）として、その命脈を保ち続け、地球環境問題の解決に向かって、学問の細分化に対抗する俯瞰的なものの見方、包括的な枠組みである「サステナビリティ学」の基本的な立場と合致するものである（同上、227頁）。

ここでは、視知覚に傾斜し、地域性を捨象しがちな景観工学的見方の元のところに戻って、地域性を含む景観生態学的観点を参照し、地域の住民による景観計画のあり方についての知見を得る。

『景観生態学』という自分の書名を、15年後に『ランドスケープエコロジー』とあらためる武内は、最も単純な「環境」の理解は、環境とは外的要素の総和である、というものである。しかし生物学の立場からは、こうした物的な環境の理解は十分とはいえない（同上、8頁）。とし、このことを明確に示したものとしてユクスキュルの著『生物から見た世界』を挙げる。ユクスキュルは、

すべての生物は機械に過ぎないのだという確信を固執しようとする者は、いつの日かこの環境世界を見てみようという望みは捨ててしまった方がよい（ユクスキュル、7－8頁）[3]。

と述べ、生物の機械論的見方とは対照的に生物に主体性をみる立場を

われわれの感覚器官が知覚（の行為）（Merken）に、運動器官が作用（の行為）（Wirken）に役立つものだとの考えをまだもっている人は、動物においてもただ単に機械的な構造を見るだけでなく、その機関士たちがちょうどわれわれ自身がわれわれの身体に組みこみになっているのと同じように、その器官の中に組み込まれているのを見出すであろう。だがそうならば、その人はもう動物を単なる客体としてではなく、知覚の行為と、作用の行為とをその本質的な活動として保持する主体と見なすであろう（同上、9頁）。

と述べる。そして、生物主体の展開する場について

こうなれば、環境世界へ通じる門はすでに開かれたのである。なぜならば、主体が知覚するすべての物がその知覚世界（Merkwelt）となり、主体がおこなう作用のすべてがその作用世界（Wirkwelt）となるからである。そして知覚世界と作用世界が共同で一つのまとまりのある統一体、つまり環境世界（Umwelt）を作り上げるのである（同上、9頁）

と述べる。このような考え方は、武内が、2006年出版の著書の「主体－環境系」という節においてユクスキュルに言及するように、景観生態学の一つのキーとなる考え方である。

主体－環境系の提唱者沼田は、ユクスキュルが、

観念論的全体論に突進してナチズムへの協力という線をたどったのであった。このような脱線はわれわれに多くの反省を与えるが、彼も初志においては生物主体的な環境をとらえようとしながら、人間主観的なものに流されてしまったのではなかろうか（沼田、85頁）。[4]

と批判する。「観念論的全体論」の「全体論」は、英語の「holism」であり、「全体は部分の総和として認識できず、全体それ自身としての原理的考察が必要である」（広辞苑）とする考え方を意味する。「観念論」とは、「観念的なものの根源性を主張する立場」（広辞苑）である。沼田は、

社会と個体との関連については私は決して生物社会の全体的な面のみを強調する意図はない。社会や共同体といっても、個体や種からなりたっていることはいうまでもなく、個体

の生活ないしはそれ以下の次元から社会というものに迫る手もあるはずである（同上、18頁）。

と述べる。そうは言っても、

しかし生態学は、生物の生活を社会や共同体という次元において解明していくところにその独自性がある。（同上、18頁）。

と述べ、生活について

生物の生活には、個体維持的（自己保存的）生活と種族維持的生活の二面がある（同上、35頁）。

個体維持的（自己保存的）生活とは、“生きること、生き残ること”，もっと端的に言えば，“食べること、栄養をとること”である。このためには、

種外関係として、無機的環境とのたたかい（action, reaction）、

種間関係として、食物連鎖や生活空間の奪い合い（在来植物と帰化植物との競争のごとき）、優占・従属関係、

種内関係として、なわばりや順位制、植物の種内競争などがあげられよう。（同上、36頁）
種族維持的生活とは、基本的には、

種内関係として、“子どもをつくること、ふやすこと”で、“生殖すること”である。（同上、36頁）。

いわゆる自家不和の現実ごときも考慮する必要があるだろう（同上、36頁）。

（改行と一字下げは、引用者による。）

と述べる。

生態系を主体－環境系としてとらえる沼田の見方からは、

某生態系という場合は、単に生態系のスケールを示すだけのものであってはならない（同上、35頁）。

そうでないと生態系というものを、単に生物と環境を並列的によせ集めたきわめて不十分な意味での“系”として理解することになる（同上、35頁）。

系は単に同格の要素の集合ではなく、系の要素にはその主体をなすものと、この主体に依存するものがある。このような主体と、主体に依存するものが何であるかはわれわれの研究目標により異なる。（同上、35頁）

これは、主体が変われば、その主体を取りまく外的要素の編成が変わり、主体自体の内的変化や主体間の相互作用による外的変化により、編成自体も変わるという動的变化を意味する。

この主体－環境系というとらえ方においては、何を主体とするかにより、環境の内容が変わってくる。たとえば、植物を主体にするか、動物を主体にするかによって、生態系の内容が変わる。このことを沼田は、次のように定式化する。すなわち、

同じA, B, C, D, . . . の要素からなる生態系 (S) もたんに $S=f(A, B, C, D, \dots)$ ではなく、Aを主体とする生態系S (A) は $S(A)=f(B, C, S, \dots)$ とか、また $S(B)=f(A, C, S, \dots)$ といった具体的構造を想定して、その上で解析をすすめるなくてはならない。(同上, 43-44頁)

ここでの主体とは、

個体や種が分散しあるいは集合して形成する生物の集団や共同体を主体とする主体-環境系の構造と機能を明らかにしようというのが生態学であるかぎりにおいては . . . (同上, 7頁)

とあるように、主体にもさまざまなレベルが想定されている。また、沼田は、主体-環境系を、biocoenosis-biotope systemと英語表記している(同上, 17頁)。沼田は、生理学者キャノンによって確立された生物体内の恒常性維持という概念の確立を生物主体的な環境把握の前段階として言及する。

生物個体は非常に不安定な素材からできているが、それだけに外界からの刺激にすぐ応じて自分自身を変化させ、内環境の恒常性を保っている(藤井, 1965)。この生物体内の恒常状態はキャノン (Cannon, 1926) によってホメオスタシス (homeostasis) とよばれた(同上, 21頁)。^[5]

そして、生物的主体的な環境把握においては、主体のとらえ方、重点の置き方によって環境の内容が変わることを、

主体が社会であるか個体であるか細胞であるか、あるいは動物であるか、植物であるかということにまず注意をはらわねばならない。そのことによって、一つの系として生体と切り離すことのできない環境、生物というときの必然的にこれにかかわりあってくる環境の概念が浮かびあがってくるであろう。(同上, 22頁)

という。さらにこの観点の誤解について述べ、この観点を敷衍する。

生物主体的環境とは、生物にとっての環境、主体としての生物に関与するかぎりでの環境を意味する。つまり主体である生物を離れては存在しえないものなのである。このところが主体的環境論を主観的、観念論的と誤解させるゆえんであるが、このことは生物主体と独立の外界を否定することにならない。そうした外界の存在を認めた上で、なおかつ、その一部(生物の生活に関与する部分)を環境とみなすのである。(同上, 22頁)。

環境とは“生物の生活に関与する諸条件”である。(同上, 32頁)

主体的環境といったけれども、じつは生物と環境とは峻別しうる概念ではなく、そういう主体がすでに過去の環境をとりこんで生活史の産物であると同時に、現在においても、また将来もなお絶えず環境を主体化しつつあるのであり、そのような時間的、歴史的な存在である生物から環境をきりはなすことはさきわめて困難なことである。(同上, 23頁)。

このような環境のあり方を、沼田は「機能的環境とよんでもよい」としている（同上、23頁）。

社会的なものを追求するためには、その部分の加算以上の全体性をただ強調するだけであれば、かつての全体論とおなじ轍をふむことになるから、われわれはもっとはっきりした実体をつかまなくてはならない。それにはまず、広義の生物社会においてはじめて生ずる現象としての個体、種、生活型などの間にみられる相互関連（これにはクレメンツのいう action, reaction, coaction のごときが含まれる）こそ重点的に追求さるべきであろう。（同上、24頁）。

生物共同体をひとつの全体として、一つの有機的体制としてとらえるという道は、すでに古く相観学（Physiognomikunde）としてはじまったわけである。フンボルトの相観型から、ラウンケア（Raunkiaer）の生活型に通ずる種類群のタイプの把握は、同時にそれら生活型の類似した種類群のつくりだす（なかなづく植物共同体に顕著な）景観的特徴を把握する道とつながっている。（同上、25頁）。

ここにきて「景観」という用語が登場する。景観生態学でいう「景観」は、生物共同体の全体性を表現する用語であり、環境と生物主体との相互作用の結果としてつくり出される様相を表す用語である。この景観的特徴の把握について、沼田は、

群落の相観（これは生活型をとおしてその立地を反映しているものであるが）によって植物共同体の性格がとらえられることになる。そしてこの方向には休眠型、生育型、繁殖型などいろいろあろうが、一般的にいうならば、類型学的方法の適用である。（同上、25頁）。

沼田は、景観把握の次に群落構造の問題に入っていく。

遷移に関して（同上、28頁）。

機能的環境把握－生活型係数（同上、31頁）。

生活の展開されるレベルは、個体群－種社会－生物社会のそれぞれのレベルであって、それらのレベルにおける生物の生活と環境の問題が、ここでの主題となるわけである（同上、32頁）。

そして、

生物の具体的な“生活”と環境との関係を考察する場合、自然に問題が限定されてくる。生物の生活に法則を探し求めてきた生態学では、個体生態学、個体群生態学、群生態学といった分科を認める場合が多かったが、厳密な意味では個体には行動はあっても真の生活（Haushalt）はない。（同上、31頁）

と述べる。つまり「個体生態学」という言い方は是であるが、用語「生活」を使用する「個体生活系」という言い方は否とするのであろう。

生活系は個体群以上のレベルではじめてなりたつ（同上、34頁）。

個体群の上にあってこれを統一するのが種社会である。種は従来、系統的、歴史的にみら

れることが多かったが、今西（1949）は、これを社会的、空間的にとらえることについて注意を喚起した（同上、31頁）。

ここで引用している沼田の考えは、1967年の出版の文献からであるが、最近（1996）の文献では、景観生態学の範囲はさらに広げられて、「景相生態学」「omniscap」という用語が使用される。

景には視覚に訴えるものだけでなく、五感に対応し、さらに心のなかの景観（inscape）をも含めるのである（沼田、2頁）〔6〕

と述べる。「心のなかの景観」は、国土交通省が文部科学省の協力を得て、2008年に発表した景観まちづくり学習の推進のためのプログラムに見られる、

「景観」とは、まちや地域がどのように見えるか、ということですが、その字が示す通り、対象となる景（風景、景色）があり、それを観る人がいて、はじめて成り立つものです。「景観」は、それを観る人の心に現れる景色だとも言えるでしょう（文部科学省報道発表資料頁 http://www.mlit.go.jp/report/press/city07_hh_000004.html アクセス2011/1/16）

と呼応する。沼田は、

ランドスケープは本来は、周囲の条件を含めた、視覚的な対象といえる。（沼田、3頁）〔6〕とし、続けて、

和辻（1939）はその著『風土－人間学的考察』のなかで中部ヨーロッパを“牧場的風土”と名づけた。この牧場的景観はブナ林地域の遷移段階であり、家畜の放牧をとおして成立するヨーロッパの人間－環境系の現実的なランドスケープである。このような牧場（放牧地）の潜在自然植生（極相植生）はブナ林である。ヨーロッパの高山の森林限界がしばしば気候的な森林限界と違う現象というのも、放牧の影響という人間－環境系のひとの現象とみるべきであろう（同上、3頁）。

と述べ、さらに、

上述のような放牧地は人工草地もしくは半自然草地であり、Augustin Berque（1988）のいう環境学（mesologie）の概念（自然－文化史）でもあり、一方、Yi-Fu Tuan（1974）の「環境受容・態度および価値」の研究から導かれたtopophilia（場所への愛）に通じるものでであろう（同上、3頁）。

と述べる。

沼田が挙げている和辻、ベルク、トゥアンの「人間と環境との関係」についての深い考察を論じることが、本稿のテーマからはずれる。しかし、哲学から出発している和辻は別としても、地理学から出発しているベルク、トゥアンの立場について多少なりとも述べることは、本稿の立場をより良く伝えると思われるので、全く不十分ではあるが、数行や数頁で述べるを試みる。

実数の連続性の定義は、循環を含んでいると言われる。循環とは、実数の連続性の定義の中

に、定義しようとしている実数の概念が、使用されていることである。三宅剛一による循環の説明は以下のである（以下の引用の改行は、引用者による）。

連続の特徴は極限要素の存在にある。極限は順序的に次のように定義される。一の無限系列は、その全系列の後に来る項があり、且つその項に先立つところのすべての項に対しては、系列中に必ずこれに後る項があるとき、極限をもつという。

之を形式的に述べると、ある集合 a が系列的関係 P に関して（１）最大項をもたぬ、（２） P の領野に属する a の要素は P に属するある要素 x に先だつ、（３） P の領野の要素中 x に先だつものは a の要素に先だつということとなる。ここに最大項というのは、 P の領野に属する a のある要素であって、しかしそれは a のいかなる要素に対しても P なる関係に立たぬものである。かような x は P によって系列化される a の上限という。

それで上限の存在ということは、 P の領野に属する一定の集合（零集合でなく、且つその集合中の要素はいずれも集合中の他の要素に先だつ如き集合）の存在に依存する。

ある集合に属するということは要素の一定の性質とみられるから、上限の定義には P の領野のうちにしかじかの性質をもった要素が存在するという命題が含まれている。これは P の要素全体に関する存在命題である。

ところで上限そのものも P の要素に外ならぬ。故に上限の概念は自己を含んだ全体の上に定義せられている。これは明らかに一つの循環的定義といわねばならぬ。

ある全体によって定義せられるものは、その全体の中に含まれるものより一段高次の階段に立つという階段説に従えば、上限とそれによって限界づけられるものとは異った階段に立つ。従って同一系列をなし得ぬということになる。（三宅、54-55頁）〔7〕

言い換えると循環が生じるのは、ある要素の性質で規定される全体と、その全体の性質との間にはレベルの違いがあるので、全体の性質で、それに含まれる要素の性質を規定しようとする場合であり、全体の性質は、それを個体的要素として含むところのさらに包括的な場面においてのみ可能であるということである。

ベルクは、次のように述べる。

ありとあらゆるものが、自然と社会の集合体という全体を定義し、またその全体（風土）が各々の要素に付与する意味を、定義することになる（ベルク、ii頁）。〔8〕

この引用の意味することは、自然や社会という全体を定義するありとあらゆるもの（要素）に対して、それらによって定義された全体が、風土と呼び変えられ、意味を付与すると言っている。これは、三宅の指摘する循環を生じさせる構造を示すと解される。もっとも、ベルクは、要素と全体との階段差を、メタファー（移しかえ）によって易々と解消しているのかもしれない。また、

社会は、自然に対し作り上げる表象に敏感である限りにおいて—また表象化を行うとい

う事実自体からして表象に敏感なのだが一、こうして表象化した自然から影響を受ける(同上, 43頁)。

と述べる。表象するのは、個人であり、それにより作り上げられた自然から影響を受けるというのは、循環を生じさせると解される。また、

このウロボロスのように閉じた論理は、風土の論理であり、論証的な言葉の論理ではない(同上, 43頁)。

とあり、風土の論理は、論証的な言葉の論理ではないとすることは、言葉による論証の拒否を意味するので、ベルクの立場は、循環的な立場と共に、筆者の向かう立場ではない。

トゥアンは、その著『トポフィリア』の謝辞(5頁)において、影響を受けたものとして「雰囲気」「戒めと励まし」「美しさ」「寛大な組織」を挙げるが、文は挙げていない。日本語版への序において、1952年の大学院生の頃のキャンプにおける朝の目覚めの光景を述べた後に、段落を変えて、

私がこの逸話を語ったのは「トポフィリア」を理解しようとする私の探求が、ある程度、個人的な経験に基づいていることを説明するためである。

不毛の土地の光景に対する私の強烈な反応は、誰かに一目惚れをすることに似ており、私を驚かせた。そして私は、(多くの点で、近づき難く無慈悲な)不毛の土地と似たような恋愛をしてきた人々を、彼らの属する文化や歴史上の時代にかかわりなく、私の「同類」として考えはじめたのである。(トゥアン, 7-8頁, 改行は引用者による)[9]

これらの記述からうかがい知れることは、トゥアンは、言葉を介さない直接的な自分の「知覚」を第1のもの、第1の疑わざるものとして出発している。当然、自分だけでなく、他者にも自分と同様な「知覚」をもつという信頼を寄せている。筆者は、このような知覚や他への信頼から出発しない。このことを説明するものとして、次の文を挙げる。

デザイン場で、例えば、屋根の形をデザインしようとして、図を描いて、「私は、屋根を描いた」と言う。これは、「屋根を材料的に描く」ことや「屋根を色的に描く」ことや「屋根を町並み景観的に描く」ことへと展開できるデザインの言語的表明である。しかし、この場合の「屋根」は、未だ存在しない「屋根」である。もし、「もの」の特性が、「存在する」とするならば、「屋根」という語が、表示しようとするものは、未だ存在せず、その「形」が描かれているに過ぎない。そこで、言い方を変えて、「屋根的に描く」と言う。さらに、ごちないけれど「屋根の形的に描く」と言う。「屋根の形的に」は、「描く」にかかる複合副詞である。この言い方において、「もの」への言及はない。特定の「屋根」の存在なしに、屋根の実在を前提せずに、このように言える。言い換えによって、存在しない「もの」への言及を消去していくことは、チゾルムのやり方である(ch50)。しかし、この文の主語、「私(デザイナー)」への言及の消去は、未だ出来ていない。チゾルムは、この点について

はなにも言わない。しかし、環境デザインの立場は、チゾルムが立ち止まった点、引き返した点を越えて、さらに進まねばならない。というのは、デザイン創造に関わるデザイン場においては、既存の物が虚無にさらされ、その存在性を揺るがされると同時に、在るものとしての「私」も、当然、虚無にさらされ、その存在性を揺るがされる。「もの」の存在化に関心するデザインの立場は、「もの」を存在せしめるデザイナーの存在にも、同様に関心を向けざるを得ない（谷口、112頁）。[10]

引用者注 文中の「チゾルムのやり方である（ch50）」とは、米国の現象学者チゾルムが、『知識の理論』50頁で行っている文の言い換えの方法を適用することを意味する。[11]

この文は、現象学者チゾルムが、文中の個物への言及を、言い換えにより対象としてのあり方を消去し、その個物の存在を消去できることを示すが、その文の話者の消去は試みていないことを示し、現象学者チゾルムは、話者の存在については問題にしていないと解される。もし問題にするならば、チゾルム自身の存在の消去を問題にすることを意味する。現象学者にとっては、話者の存在、ひいては自分自身の存在は疑う必要がないのである。永井は、独我論の問題点を二つに分けて、前半の問題点として、

・・・独我論とは、文字どおり「私だけが存在する」という主張だが、「私だけが存在する」という主張の真意は、もし私が存在しないとすれば、ある意味でそれは、何も存在しないのと同じである、という点にある。そう理解すれば、それは誰にとっても一応は納得のいく（ある意味では理解できる）主張ではないだろうか（永井、21頁）。[12]

と言い、後半の問題点について、

以前には、「私の意識」の外にあるものが存在すると言えるかどうか、独我論の最大の問題であった。そして、そうしたものが存在すると言えれば、独我論は否定されると考えられていた。今ではそうではない。そんなことが言えても、独我論は否定されはしない。問題の焦点は、独我論を語ることのできる「私」とはいったい誰なのか、という点にある（同上、21頁）

この点をめぐって、永井は、

問題になっている「私」を言葉で語るときには、どうしても二種の限定が必要になる。一方でそれは、「私」という指示詞がふつうに使われる場合のように、特定の人間を指示しているのではない。他方でそれは、特定の人間との結びつきに必然性がない、一般的な脱人格的自我のことを意味しているのでもないし、その任意の一例を指すのでもない（同上、23頁）

と述べる。この後半の問題点に関して、

現象学者たちは、この問題が終わった後の一般的な自我（とその任意の一例であるかぎりでの自分）について語っていたのだ（同上、23頁）

と述べる。つまり現象学者は、一般的な自我の意味で「私」という用語を使用し、それは容易に「人々」をも意味する。しかし、本稿の立場は、そのような一般的な自我以前の、＜私＞にまで戻った立場なので、現象学的立場にはよらない。本稿の副題の意味は、住民等の集会において景観計画素案について、どのように合意するかという方法の開発を意味するものであり、その方向付けとして、いわゆる住民間に共通の地平を開くためには、人々が「住民以前」から、住民への移行をはかることである。そのことは、

住民・計画者の在り方について考えることが、万物の在り方について考えることに導かれる。そこで、両者の存在の根底へと突破し（「突破」とは、目の前の壁・前提としている地平の外へ出ようとするだけの意味し、出た先に何があるか、どうなっているかということについては、本稿では触れない。）、そこから、「今・ここ」へと還って来ることを計画の実現への道筋と考える（谷口、32頁）。[13]

という文で意味されることである。この文中の「『今・ここ』」は、「存在の根底へと突破する」前の「今・ここ」とは異なり、例えば知覚理論で言われる「アハ体験」（茂木、208頁）[14]の前と後のような違いが含意されている。

和辻の「風土—人間学的考察—」と本稿の立場との違いを見てみよう。和辻は、「第1章風土の基礎理論 —風土の現象—」において、日常直接の事実としての風土が果たしてそのまま自然現象と見られて良いかについての考察において、

我々はこの問題を考えるために常識的に明白な気候の現象を、しかもその内の一契機に過ぎない寒さの現象を捕らえてみよう。我々が寒さを感じる、という事は、何人にも明白な疑いのない事実である。ところでその寒さとは何であろうか（和辻、10頁）。[15]

と問うことから始めて、

「寒さを感じる」というその「感じ」は、寒気に向かって関係を起こす一つの「点」ではなく、「・・・を感じる」こととしてそれ自身すでに関係であり、この関係において寒さが見いだされるのである（同上、11頁）。

と論を展開する。しかし、常識的・日常的には、「私は寒い」が一般的表現であり、「私は寒さを感じる」は、特殊な言い方である。「私は寒さを感じる」という文を、「私は」「寒さ」「を感じる」に分けると、「を感じる」という述語は、記号論理学的に表示的不透明な文を構成する類の述語である。表示的不透明とは、文中の「寒さ」の位置が、「寒さ」の表示する（指示する）（refer）ものの存在・非存在に関わらないという意味である。したがって、あたかも「寒さ」のようなものが存在的に見いだされるかのように論を展開することは、筆者の採る道ではない。この辺りの詳細は、クワインとチゾルムによって論じたものがある（谷口）。[16]

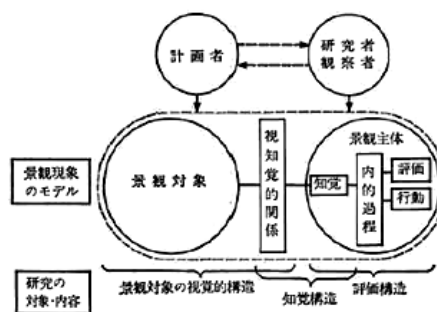
以上沼田の挙げている和辻、バルク、トゥアンの考えと、本稿が、その考えに則らない理由を極めて概略的に述べた。本稿のテーマは、既存の対象の分析的研究ではなく、枚方市の景観

計画を，新たに策定する場合の方法の研究であり，和辻，ベルク，トゥアンの立場と計画するという立場との差異がある。また，本研究は，住民集会での合意形成に資することを内的評価条件とするので，例えば，「通態」という用語は，ベルクの原著の翻訳者にとってすら難解な部分(既述のベルクの「訳者あとがき」)に入るような専門用語・専門的概念の使用は極力抑える。そのような専門用語・専門概念が抽出されてくる元になる現象は，そのようなものなしで展開している市井の住民等の生活であることが，この内的評価条件の成立を担保すると考える。

沼田の景観生態学的知見，地域性を含む景観観の知見を地区住民の景観計画という脈絡に適用するならば，表面的な視覚的側面に現れる一つの全体として景観をとらえるだけではなく，地区で展開する生活や生活史の反映としてとらえる必要があり，また，その生活にも，さまざまな広がりがあり，同一の地区で生活を展開する個人も，生活の広がりスケールにより，さまざまな役割を果たし，たとえば，家族の一員としてある場合と，町内会の一員としてある場合とでは，その役割が異なり，その役割によって価値判断や物事の評価も変わるであろうことなどを知る。このことから住民と言っても，必ずしも一つのまとまりをなしているわけではないことを踏まえて景観計画をすすめていかなければならない。

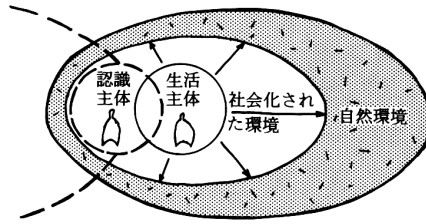
3. 景観主体の考え方

都市の景観計画という脈絡における景観現象のとらえ方を見てみよう。景観現象のモデルとして，景観対象と景観主体とを設定することが一般的であるが，それに加えて，榊原は，景観に関する事柄を認識し，操作する主体として，観察者・研究者または計画者という立場を措定し，それらの関係を図－1のように表している（榊原，409－410頁）。[17]



図－1 榊原（1982）による「景観現象のモデルと研究の対象」

この図では，計画者，研究者・観察者が景観現象モデルの外に置かれている。一方，先に参照したランドスケープエコロジーの研究者武内は，人間主体的な環境観に基づくランドスケープのとらえ方を，図－2のように描いて，旅行者と生活者では，ランドスケープの認識が異なると述べる（武内，10頁）[2]。



図－２ 武内（2006）による「人間主体的な環境観に基づくランドスケープのとらえ方」

主体の身分・位置による景観認識の異なり方は、あくまで景観対象を巡ってであり、図－１の「計画者、研究者・観察者」は、やはり景観対象を、その研究的関心、つまり社会化されたものを見ているわけであるから、図－１において「景観現象のモデル」の丸囲みの外ではなく、景観主体の中に含まれると考えるべきであり、この点が景観研究や景観計画の特殊性のひとつを示すものである。つまり景観は、自然科学一般の現象とは異なり、景観主体に内的に現れるのであり、景観を構成する山河大地が、景観主体の外部に、景観主体を離れて存在すると思えることは誤解である。もはや、それは景観対象としての山河大地ではなく、自然地理学的な対象としての山河大地である。

このように考えると、景観についての住民集会は、多数の異なる景観主体の集まりであることになり、景観評価の取り扱いについても、そのことを考慮した処理をする必要がある。

４．景観対象の考え方

景観調査においては、諸種の景観的要素の存在の観点から地域を複数のまとまりに区分し、その中の景観データを取得するという方法が取られる。これは、自然科学的研究の一般的な手続である。ところが景観計画が分けられた地区毎に行われるならば一つの問題を含んでいる。

有機体的な全体を要素に分けて、それらの相互関係を設定し、全体の挙動を制御するという考え方は、システム論的考え方である。しかし景観は、このようなシステム論的アプローチになじまない側面をもつ。システム論的考え方においては、システムを構成する要素は、それへの入力と出力とにより制御されることが措定される。しかし、景観計画において地域を、一時地区に分けて考えるとしても、景観的には、分けられた地区を「図」として、その背後に、近接する地区の景観が「地」として存在し、視野に入っているはずである。言い換えれば、地区に分けることは、その地区は、景観的閉鎖系と考えることを意味するが、実際は、景観的・視線的に開放系をなしている。「かく在る」と「かく見える」とは異なる性質をもつ。また、システム要素は、分解できない単位であり、要素の中を覗くことができないブラックボックスであり、入力と出力によってのみ他の要素と結びついている。しかし、景観は、ある限界まで拡大して詳細に部分を見ることは可能である。（ここではシステムと要素との関係についてののみ

考え、システムとサブシステムとの関係についてではない。)

システムと景観との差異を直観的理解するため図-3と図-4を見る。この二つの図は、同一人物の自画像であり、現実の人物から抽出された図である。似ているか似ていないかは別にして、この大きさではどちらも大差ない。しかし、図の構成要素の間に大きな違いがある。左図の要素は、キーボードの記号であり、拡大すると白黒の点の分布になり、本人と固有な関係にはない。右図の要素は、その人物が撮影した写真をモザイクピックアップソフトで処理したものであり、拡大するとさまざまな写真が見える。しかも本人が研究遂行の過程において撮影したものを使用しているので本人と内的な関係にある。肖像画は、その人の人生を映すものであるという観点からは、右図は肖像画的であり、左図は、本人の姿形を伝えるという意味で機能的である。(これらの図の部分拡大したものは付録参照。)

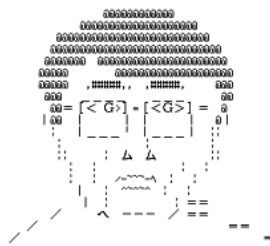


図-3 自画像1

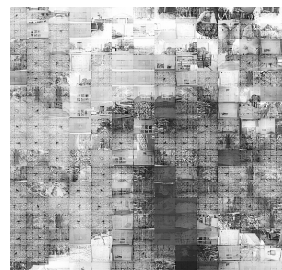


図-4 自画像2

図-4もどんどん拡大していくと、ある段階で、いわば相転移を起こし、インキの点の分布になることにおいて、機能的であることに変わりはないが、さらに拡大を思考実験的(数学的)に続け、紙の繊維やインキ粒子をはるかに超え、さらに、それらの分子や原子レベルをはるかに超え、素粒子などの究極的レベルにまで、すなわちプランク長約 10^{-33} センチ辺りで、現在の物理学的限界、量子論と相対性理論に基づく物理学の限界、言い換えれば「そこに何かがある」とは言えない状況となる。物理学的何かとは、物質や質量であるので、物理学的に何もないという状態である。限りなく拡大するという思考実験は、物理学的限界に突き当たる。これは二つの平行する鏡の間に置いたローソクの像は、鏡に無限の小さな像を映し合うと考える限界、つまり、光の波長よりも短いサイズの像は得られないという限界にも似ている。

景観は、一般に景観主体と景観対象との距離に基づいて近景・中景・遠景という分け方がなされるが、近景と言えども、中景や遠景を背景にもつ。遠景と言えども、景観主体の立つ位置から空間は、断絶なく遠景まで続いている。

以上、ここまで、概念的に景観調査・分析の側面について、景観主体と景観対象との関係、誰が・何を について論じてきたが、次章では、事例研究として枚方市の景観調査と景観計画とを比較しながら景観計画のあり方について論じる。

5. 事例研究：枚方市の「景観調査書」と「景観計画書」の比較

枚方市は、平成6・1994年に『枚方市都市景観基本計画 枚方の新たな魅力を創る』（以後「景観計画書」と略する）を作成している。しかし、景観計画は、現実の景観の調査・分析から始めることが一般的であり、枚方市は、「計画書」に先立つこと2年の平成4・1992年に『枚方市都市景観基礎調査』（A4、131頁）（以後、「景観調査書」と略す）を発行している。「景観計画書」には、「基本計画に先立って実施した基礎調査をもとに」（22頁）とあり、この基礎調査が、「景観調査書」を意味すると考えられる。また「景観計画書」の作成メンバーは記載されているが、「景観調査書」の作成メンバーの記載がないので、両書の作成メンバーの重複性はわからない。

現状の景観調査・分析結果が、景観計画にどのように接続されるかにおいて道が二つに分かれる。1つの道は、「現状の景観が・・・であるならば、景観計画は・・・である。」というものであり、もうひとつの道は、それとは逆の「もし景観計画が・・・であるならば、現状の景観は・・・である。」という考え方である。ここでは、前者を名付けて「自然科学的景観計画」、後者を名付けて「デザインの景観計画」とよぶ。果たして枚方市の場合は、どちらであろうか。

5-1 枚方市都市景観基礎調査書について

その概要を以下に記す。

① 調査の目的

総合的な景観行政を進めていくために、枚方の景観を構成している自然的要素、地形的要素、歴史的文化的要素などを系統的に調査し、都市の美観の現状、今後の動向などを把握するものである。

② 調査の内容

1. **区域別景観調査**：枚方市全域を21地区に区分し、各地区別に特性と現況を把握する。
 - 1-1 景観の構成要素は良好な景観を演出するものまたはその可能性のあるものを取り出す。
 - 1-2 スケールは、都市レベル、地区レベル、町区レベルの序列に従い分類。
 - 1-3 取り出された景観構成要素は、
 - 景観構造の現況
 - 潜在的景観（原風景）
 - 景観イメージ図
 - 景観構成要素
 - 景観に影響を及ぼす諸計画の概要

- 市政モニターによる求められる景観
- 現況景観の問題点
- 現況写真（各地区10枚のカラー写真）

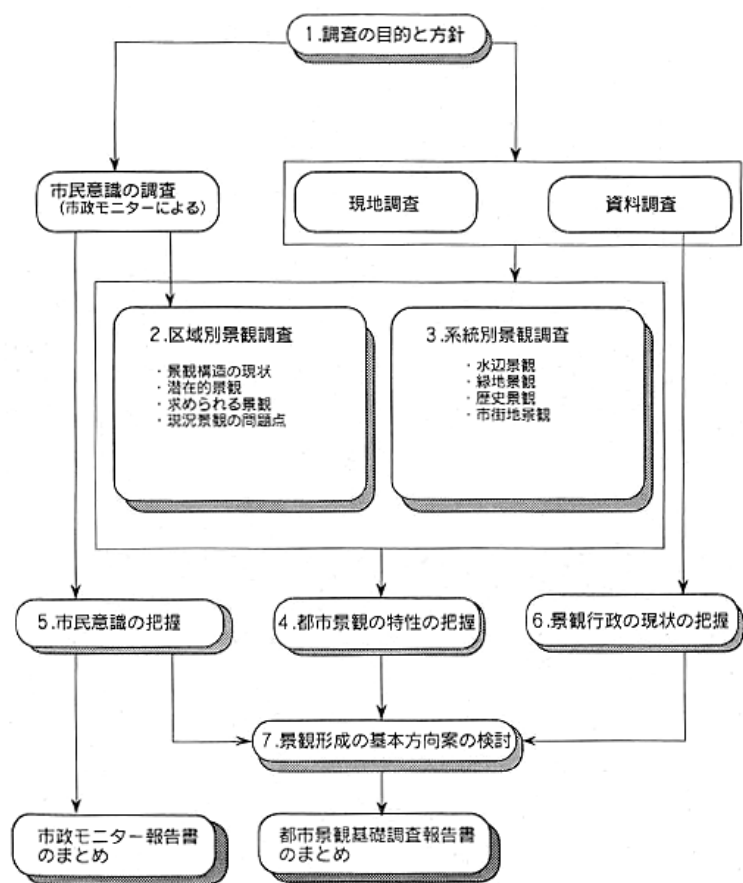
を含む、A3サイズの表21葉にまとめられている。

2. **系統別景観調査**：景観を系統別に整理し、その特性と要素を把握する。
3. **景観の類型化と特性の把握**：景観を類型化し、類型別の特性と構造を把握する。
4. **市民意識調査**：市政モニターにより市民の景観に対する意識を把握する。

これらの関係は、図－5のような調査フローに示されている。

調査全体の流れを形式的にみると、整ったものであり、特に市政モニターの評価を入れていることは、ともすれば分析的となる景観の見方を、総合的に回復する役割を果たすことが高く評価される。つまり景観を眺め続けるという経験を積むことにより、見え方が変わってくる。そのものだけでなく、そのものの周辺、そのものの成り立ちなどに気づくようになり視野の深い見方が出来てくる。このような見方は、現地に着くまでの道中を含むだけでなく、現地に立つことにより形成されるものであり、一枚の写真の枠に納まらない。この点が、市政モニターによる「求められる景観」を記載することによりカバーされている。

一方、「系統別景観調査」という章の「系統」という用語の意味がよくわからない。一般に、「系統」は、概念の包摂関係や原理・法則による順序だてたものを意味する。しかし、この調査書では、表－1の分類2のような分類項目が立てられ、その中に景観構成要素が配分されている。「区域別景観調査」の「景観要素種別」項目（表－1の分類1）と「系統別景観調査」項目（表－1の分類2）で採用されているものを並べてみると大差はない。都市レベル・地区レベル・町レベルというスケールによる要素の区分けは、「区域別景観調査」と「系統別景観調査」の両者でなされていて、この点でも大差はない。さらに、「都市景観の類型化」という章の意図もよくわからない。強いて類推すれば、枚方市の景観要素を取り出し、それらを互いに素な集合に分類し、名前を付ける作業を都市景観の類型化とよんでいる。その作業で抽出された分類項目が「自然地景観」「都市軸景観」「まちなみ景観」である。そして抽出された項目が、これからの景観形成の方向を示唆することを意図しているように思われる。この章の結論的なものとして、枚方市の都市景観類型と構造という図が掲載されている（図－11）。この図の凡例をみると「眺望景観」「自然地景観」「都市軸景観」「市街地景観」という項目とその細項目が記載されているが、「市街地景観」は、分類2に含まれる項目であり、もしこれが、分類3の「まちなみ景観」の誤りとすると、分類2に入っている「公園・緑地」「歴史街道」を除いて分類3と対応する。この図は、景観構成要素の平面的なパターンを示すが、見えるか見えないかを示す高さ関係の構造に関するものが入っていない。表21葉の中で示される断面的なものの情報が利用されていない。



図－５ 調査フロー（「枚方市都市景観基礎調査書」より）

表－１ 分類区分比較表

分類 1		分類 2		分類 3	
景観要素種別	水系	水辺景観		眺望型景観	
	地形	緑地景観		環境型景観	
	緑地・公園	歴史景観		広域的景観（ランドスケープ）	「眺望型景観」に対応
	歴史文化財	市街地景観	住宅地	都市的景観（タウンスケープ）	中間的
	都市		商業業務地	街区的景観（ストリートスケープ）	「環境型景観」に対応
	展望台		工業地	自然地景観	山間地景観
	ゲート		道路・鉄道		河川敷景観
	ランドマーク		ランドマーク施設		田園（集落）景観
シンボルゾーン	コミュニティ形成施設	都市景観の類型化	都市軸景観	丘陵斜面地景観	
				河川軸景観	
				道路・鉄道軸景観	
			まちなみ景観	住宅地景観	
				商業業務地景観	
			工業地景観		

5-2 「景観調査書」と「景観計画書」の景観区域区分の比較

枚方市の市域は、「景観調査書」では、

- ① 地形は、等高線20m以下、20m～50m、50m～100m、100m以上の4区域に分けられ。
- ② 水系は、淀川、船橋川とその上流の八田川、穂谷川の下流・中流・上流、天野川の7区域に分けられる。
- ③ 幹線交通として、京阪本線、JR片町線、国道1号線とにより分割される。

とあり、これらを重ね合わせて、合計21地区に分けたものが図-7である。

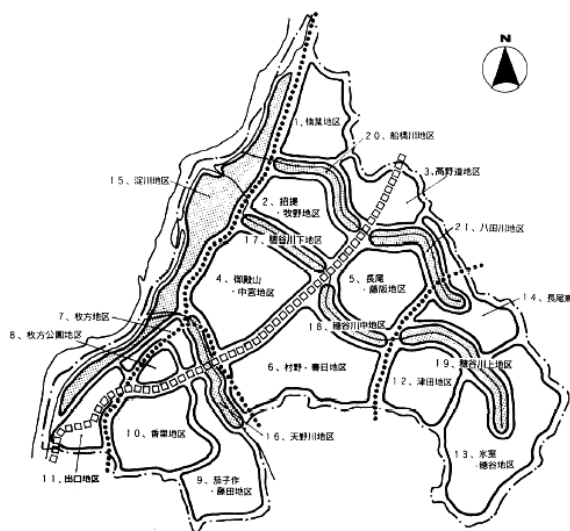


図-7 21の景観区域の設定
(枚方市都市景観基礎調査書(13頁)より)

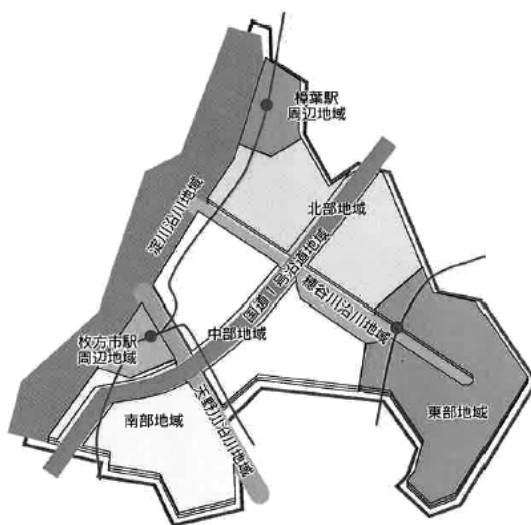


図-8 10の景観区域の設定
(枚方市都市景観基本計画書(41頁)より)

景観計画のための景観調査という視点に立つと、枚方市全域を21地区に区分し、地区毎に景観要素を取り出すという操作は、3で論じたような1つの問題を伏在させかねない。周知のようにルビンが1915年に知覚において、図形のどこに注目するかにより、何が見えるかが変わってくることを指摘し、図-9のような「図地反転図形」の壺を示した。白い部分に注目すると壺が見えるが、黒い部分に注目すると、向き合う二人の人の横顔が見える。このように、注目して見えるものの形(図)は、注目していない部分(地)により支えられている。したがって、見えるものを取り出すことに専念し、地の働きをないがしろにしたまま異なる地に置くと、全体は、こんなはずではない効果が出かねないという問題である。この問題は、景観を分析することのみを考える限り表に出てこないが、景観計画に移行するとき、この問題を忘れるならば、こんなはずではなかったという事態を招く危険がある。

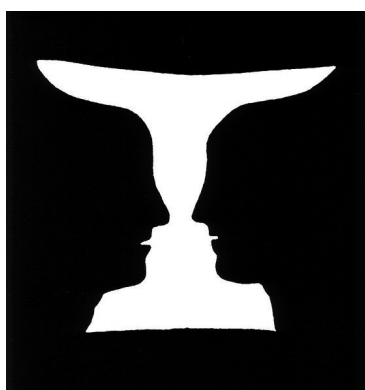


図-9 ルビンの壺
〔ウィキペディア〕より

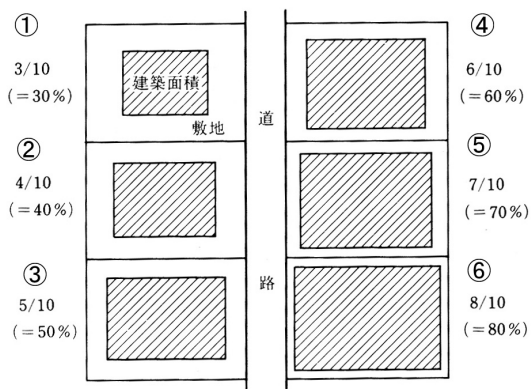


図-10 図と地の転換

また図と地の関係は、その面積の割合によって優先順位が変わる。例えば、図-10では、斜線の部分の面積を広げてゆくことにより、①では地である白い部分が、③～⑥では白い枠という表情をもつ図に転換している。

図と地の関係は、景観記述文にも見て取れる。図と地に言及する文を「調査書」から拾い出すならば、

- 周辺の社寺の歴史的景観を田園景観の中に残す（1 樟葉地区）。
- 田園風景を基調として緑豊かな町をつくる（2 招堤・牧野地区）。
- 京阪電車以西の市街地の影響のもとに景観の変化が見られる（10 香里地区）。
- 古い町並みと近代的な街の共存をはかる（12 津田地区）。
- 里山景観（21 八田川地区）。

などが挙げられる。これらは、市政モニターによる「求められる景観」の記述であるが、図と地の両者に言及しており、これらを念頭に置く限り、景観計画において両者に目配りすることを忘れさせないであろう。逆に、図のみに言及する文を取り出すと、

- 幹線道路の整備（4 御殿山・中宮地区）。
- 緑道のネットワークの展開（5 長尾・藤阪地区）。
- 商店街の活性化（11 出口地区）。
- 公共文化施設の増設（13 氷室・穂谷地区）。
- 野外活動施設の充実（14 長尾東地区）。

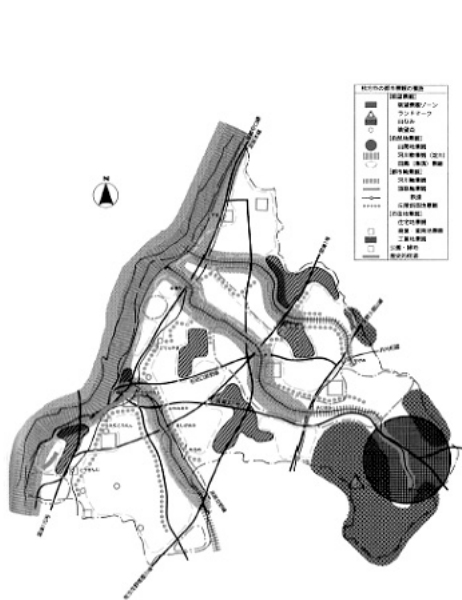
などである。これらは、既存の景観の中から注目する要素のみを取り上げており、その背景となる事柄への言及がないので、仮に箱物として公共文化施設が建てられたとき、ただその物だけに専念すると、場違いの物となり、かえって景観を壊すという事態が生じかねない。

一方、「景観計画書」では、10地区に分けられている。分け方の根拠は、点的・線的に展開

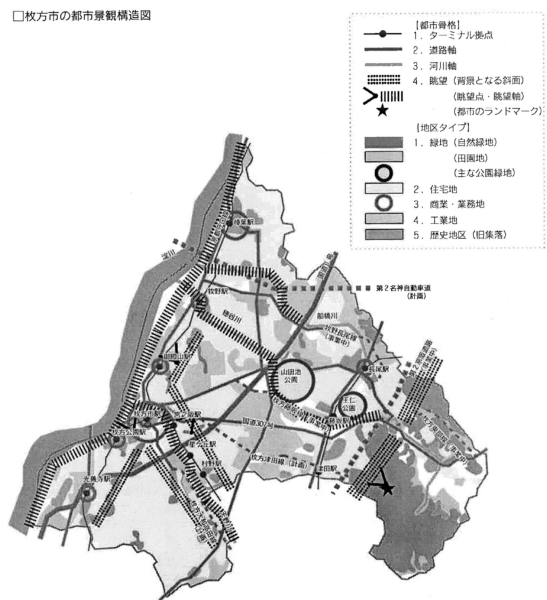
する要素として4都市骨格（ターミナル拠点景観・道路軸景観・河川景観・眺望景観）（11細分）と、面的な広がり要素として5地区タイプ（緑地景観・住宅地景観・商業・業務地景観・工業地景観・歴史景観）（14細分）が取り出され、それらの重ね合わせにより、図－8に示すような10地区に分けている。「景観調査書」に比べて、約半分の数である。1本の道路軸地区、3河川軸（淀川・天野川・穂谷川）地区、2拠点地区とそれらの間に挟まれる4地区の計10地区である。「景観調査書」の21地区の内の面的地区の複数個が、「景観計画書」では一つの大きな地区にまとめられている。

5－3 枚方市の景観構造図について

都市景観の調査から都市景観の構造が抽出されることが期待されるが、「景観調査書」では、図－11に「構造」という用語が入っている。凡例を見ると、表－1の分類1，分類2，分類3から項目が取り出されて並列されているだけであり、各地区の景観を貫く新しい項目・要素は入っていない。



図－11 枚方市の都市景観類型と構造
（枚方市都市景観基礎調査書（108 頁）より）



図－12 枚方市都市景観構造図
（枚方市都市景観基本計画書（29 頁）より）

一方、「景観計画書」は、図－12に示したものを、枚方市の都市景観構造と呼んでいる。この図の凡例に「4眺望（背景となる斜面）」とあり、また、地区タイプの説明文に「都市全体の下地となる。」とある。「背景」「下地」は、前節で述べた「図と地」に関連する概念であり、「景観調査書」より、景観に対する理解が一段と深まっている。

5-4 景観計画について

既存の現実の景観は、それを人為的に分析しても、その景観が要素に分かれてしまうことはなく、また語句で取り出されるものを支える背景が消失することもない。この点は、景観調査では問題にならないが、それに対して、新景観の計画は、更地に街を作るようなもので、本来的には、あらゆる事柄を計画的に再設定していかなければならないのであるが、そのようなことは事実上困難であり、計画される部分に目立って関連する部分のみが視野に入れられ、その背景をなす部分については暗黙の前提とされる。

この欠点をカバーするものとして新景観のコンセプトが、概念的に設定される。文による計画の目標表現である。計画コンセプトは、多数の人が、それぞれの場面で作業するときの指針になり、言い換えれば、多数の人の心をひとつの方向に向け、それぞれの働きをひとつの統一的全景に織り込む働きをする。

「景観調査書」の景観計画の方向づけとして「景観形成の基本方向案」という7章が当てられている。「7-A基本方向」で、総合計画の目標に言及され、枚方市の歴史的景観資源の豊富な存在が挙げられ、それらの利用・活用により地域の個性を発揮する可能性がうたわれている。「7-B基本方向の展開」では、分類3の項目が、コンセプト的に「みず」「みどり」「みち」「いえなみ」と呼び直され、それに「こころ」が加えられた五つの要素が大切な景観形成のテーマとして設定されている。このようなテーマに沿って歴史的景観資源の利用・活用について具体的提案がなされることが期待される場所であるが、そうではなく、一般的に述べられることに留まる。つまり社寺林は、緑が濃いとして、段倉や大和棟は、往時の集落の雰囲気を残すものとして点的に矮小化してとらえられる。歴史的景観や文化を理解することが、地域に愛着をもつことに寄与するという一般論は語られるが、具体的に、線的に、面的に景観を構成していくという観点がでてこない。整備レベルとして、「保景」「復景」「除景」「添景」「改景」「創景」の設定がなされるが、一般的概念的設定にとどまり、どの地区のどこという場所とのつながりをもつ具体的計画として提案されない。

一方、「景観計画書」のコンセプトを見ると、

- 景観形成は、総合計画の中で、都市にゆとりや快適性、自然の豊かさという魅力をつくりだすためのまちづくりの新たな視点として位置づけられています。
- 住む人の一人ひとりが愛着を感じ住み続けたいと願うような地域環境。
- 訪れる人にいつも新鮮な感動を与える個性的な都市空間。
- まちにそうした「魅力」を創造し、育んでいくことが枚方にふさわしい景観形成。

(「景観計画書」11頁)

とある。ここでも、総合計画やまちづくりとの関連づけが考えられている。また、市民の視点に加えて、訪れる人、いわば第三者の視点を考えることも取り入れられ、2章で述べた武内の

考え方と一致する。

しかし、このコンセプトは見方を変えれば、どのまちの景観計画にも適用可能な内容となっているので、このままでは「枚方にふさわしい景観形成」という点からは、希薄である。一般的、普遍的なことをどのように固有化するかについて考えねばならない。例えば、枚方市の2010年10月31日21時の天空には、図のような星空がある。星々の分布は日本全国ほとんど同じとしても、各市域の現実の景観、固有な地物と関連づけられることにより、同一の北極星も、それぞれの街の固有な夜景を構成する一つの要素になる可能性があり、それを目指すという景観計画が考えられる。枚方市は、二酸化炭素6%削減のためのライトダウンキャンペーン（「ブラックイルミネーション」）に参加しているが、それを星空の回復を目指す運動にまで高めることも一つの方策である。星空が地となり、街の地物が図となり、また街の地物を地として星空の切り取りを図とすることにより、固有な景観が現出する。図と地の関係に配慮し、計画的に操作することは、景観の固有性を創出する方法となる。この点は、第6章でも触れる。



図－13 2010年10月31日21時の星空（天文ソフト Stella Theater Pro による）

コンセプトに続いて、「景観計画書」では、5－2で述べた10の景観区域区分がなされ、「第3章 地域への展開」へと進む。そこでは、景観区域区分毎に、景観形成イメージ、景観形成の方針、景観形成の方向が、地域景観特性図、景観形成概念図、景観形成構想図と共に述べられる。しかし、いずれも図式や平面的図であり、実際の景色としてどう見えるかを実感させる立体的・3次的図は提示されていない。

枚方市全域について、景観形成総合図（図－14）が示されているが、その「総合図」性は、地区の平面的図が寄せ集められ一つにまとめられた、いわば全体図であり、景観的要素の空間的分布が「どうあるか」は見てとれるが枚方市の景観が、固有なものとして「どう見えるか」を示していない。

これらのことから、枚方市の「景観計画書」は、自然科学的景観計画であり、未だデザイン

枚方市は、その後、1998年10月「枚方市都市景観形成要綱」を制定して、景観形成の指導に当たっているが、枚方市の都市整備部まちづくり推進課のヒアリングによると、市としては「市民にお願いする」という立場であり、市民の主体性が発揮されているという状況ではないようである。



- ① 「どうあるか」だけではなく、「どう見えるか」という図が描かれることが望ましい。
- ② ゲシュタルト心理学的な「図と地」の両者を考慮することか望ましい。
- ③ システムは未分節の全体から抽出されるものであり、それから抜け落ちるものがあることを配慮することが望ましい。
- ④ 景観計画は、総合計画を先導するものであり、また総合計画の成果でもある。

などの観点から景観計画は遂行されねばならない。

これらのことを実感するため、市域境界を例に図-15、図-16、図-17を作成した。図-15の市域境界に、もし仮に壁が構築されるならば、図-16、図-17のようになる。壁越しに隣の市の山が見えている。各地区毎に区切って、その中でのみ景観計画をすることは、壁越しに見えるものを等閑視した計画を行うことを意味する。実際は、建物が視界を遮って隣接地区のものが見えないかもしれないが、道路の先や建物の間からは、遠くのものが見え、それらが地区の景観を特徴づけるものとなる可能性がある。また各地区の特性を隣接する地区に延長することにより、より固有性が強調されてくる可能性もある。

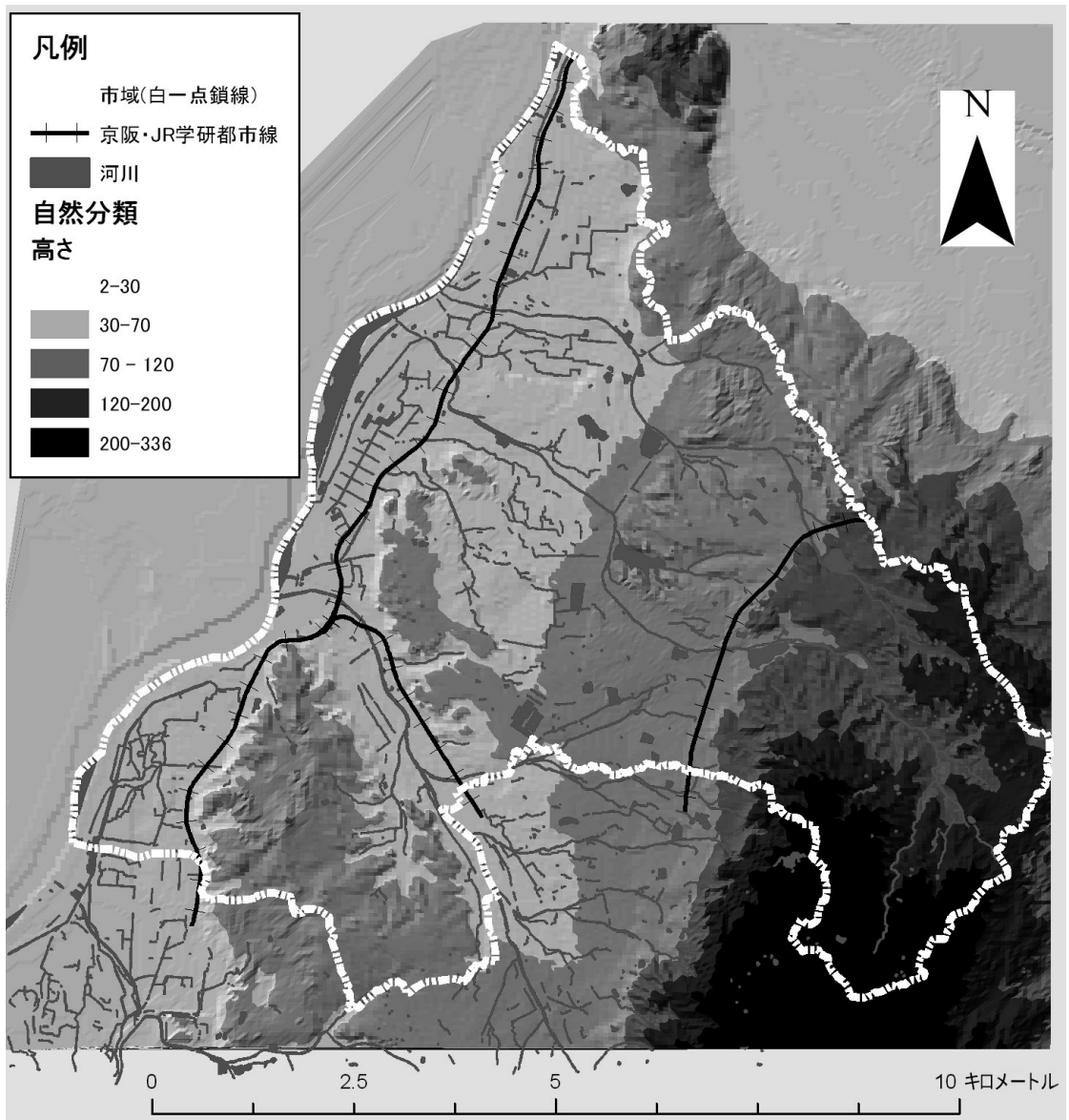
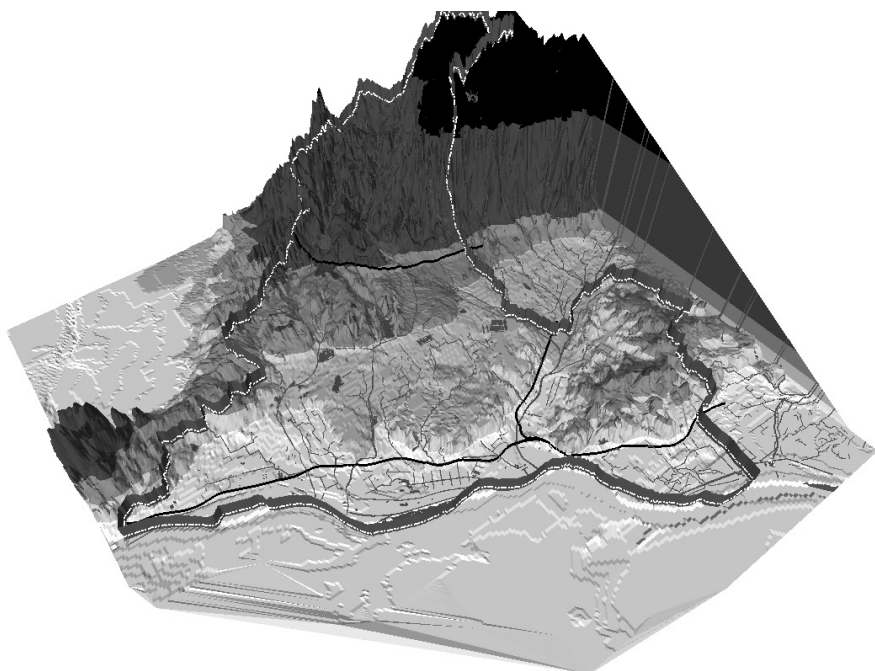
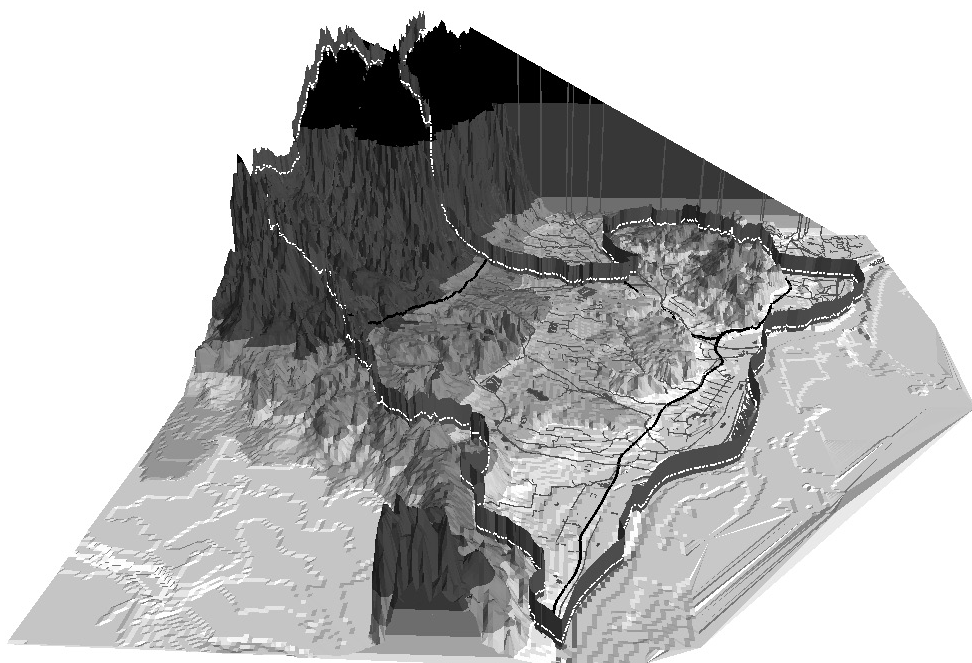


図-15 枚方市の地形など (GIS 技術による)



図ー 16 西から見た枚方市の地形など（高さを 15 倍に強調）



図ー 17 北から見た枚方市の地形など（高さを 15 倍に強調）

地区を囲む壁を透明化することを考慮する景観計画については、稿を改める。ここでは、その前提となる視覚的極大限界領域を図-18に示す。この図の円は、枚方市域の平面図形の重心点に富士山と同じ高さ（3,776メートル）の棒を立てたとして、その頂上から見える地平線を示す。その半径は約200キロメートルの円である。また、黒色部分は、国土地理院の250メートルメッシュの標高データを用いたTINを利用し、地表からの可視領域を示す。富士山が、実際に写真に撮られた直線距離として322.9キロメートルのものが知られる [18]。

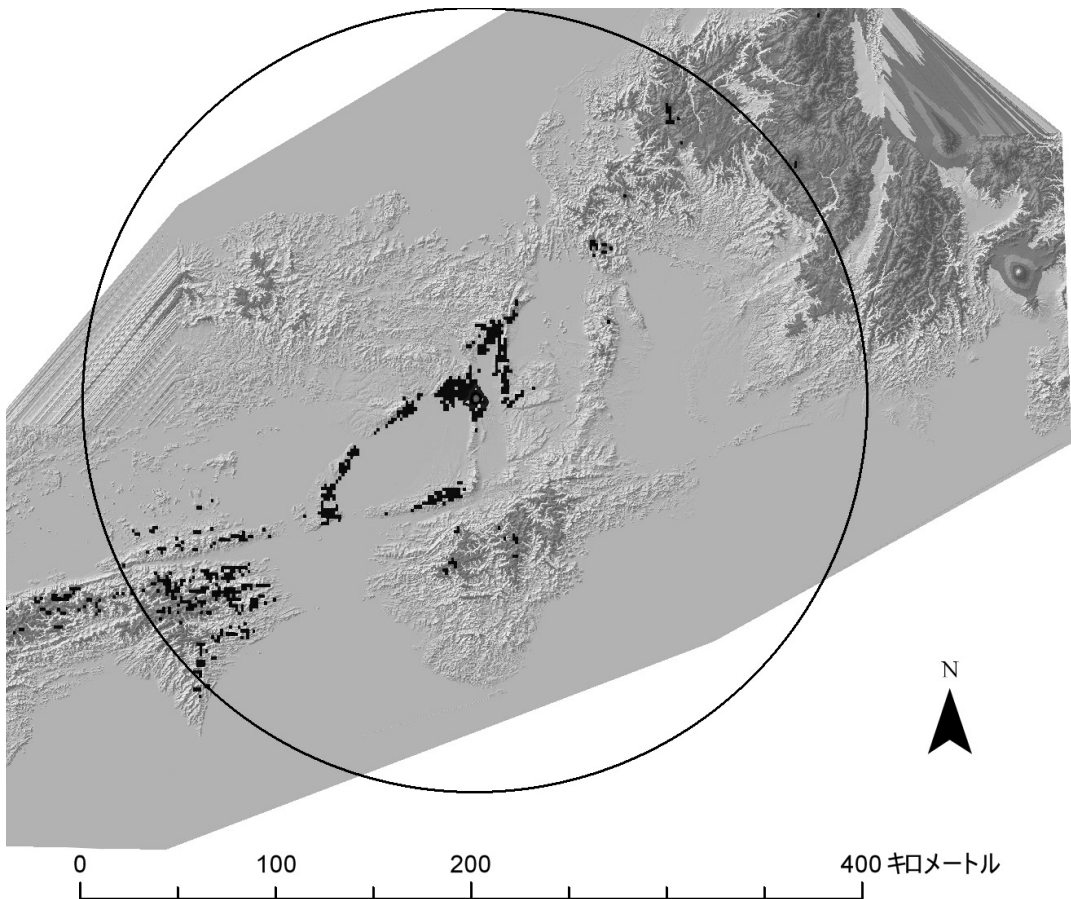


図-18 枚方市域重心の高さ 3,776m からの可視領域（viewshed）（黒色部分）
（円の半径 200km，その中心が枚方市域の重心点）

7. おわりに

ここで、本稿のまとめを簡単にし、今後の展望を述べる。

- ① ドイツ語の「Landschaft」が、1937年にわが国で「景観」と訳され、都市計画分野などでは「目に映ずる景色の特徴」という意味合いをもつとされ、本来備えていた地域性の意味を失っているが、沼田・武内などの景観生態学を参照することにより、見られる対

象と見る主体という視知覚的關係以前の意味、すなわち地理的広がりに含まれる個体(植物や動物など)は、環境を浮かび上がらせる主体であり、主体があつての環境であることを確認した。このことは、景観を、対象(山河大地など)と、それを見る主体とに単純に分けることへの反省を促す。このような観点は、近代並びに現代の自然科学が、対象を、その環境から取り出し、元の環境から、例えば実験室という環境に孤立させ、要素化し、実験条件を操作するように景観を取り扱うことへの反省を促す。

- ② 本稿並びに副題に掲げる研究テーマの主眼は、住民等が景観を計画することをどのように支援するかであり、多数の住民の集会において、景観計画素案への合意を得るためには、専門家と非専門家の立場の違いをどのように超えるかを目指さねばならないかを、図-1において「計画者、研究者・観察者」は、景観主体の中に含まれるべきであることを指摘した。このことは、景観研究における研究主体ですら、景観対象を見る景観主体であり、景観対象を浮かび上がらせることに密接な関係があることを示す。
- ③ 周知のように視知覚現象には「図と地の反転」が生じるので景観調査から景観計画に移行し、視知覚対象を操作するときには、景観調査で取り出された景観の図を操作しているのか、地を操作しているのかに注意を払わねばならないことを指摘した。なお、視知覚には視野という絶対的な閉鎖枠があり、視知覚は、人為的に設定される地区を超えるという意味で開放性を備えているが、この絶対的な閉鎖枠内のことである。
- ④ 枚方市の既存景観計画書を検討すると、枚方市全域が、地区(要素)に分けられ、各地区について景観計画が立てられている。これは、全体を部分に分け、部分を操作するという自然科学的またはシステムの観点の適用である。しかし地区を概念的に分けても、視覚的には、地区境界を超えることが一般的であることを指摘した。既存枚方市の景観調査書は、要素化を補完するように市政モニターによる文章の記述が加えられているが、これは景観を総合的に捉えていると考えられる。
- ⑤ 景観計画の具体的あり方として、GISにおける可視領域(viewshed)を適用する必要がある、その方向への出発点または視覚的極大領域の一つと考えられる枚方市の可視領域を具体的に図化した。

枚方市の景観基本計画は、16年前の平成6・1994年に作成されている。その間コンピュータを駆使するGIS技術が発展しているので、市域全体についても3次元的表示が比較的容易に行える。それらを援用するならば、国勢調査データを利用し、また立体的・3次元的な景観の検討が詳細に行える。

国レベルの国土形成計画は、日本の総人口の減少を前提にしている。このことが景観計画的にどのように現れるかを考えると、やがて、都市粗鬆症の現象、つまり「都市全体の下地となる」住宅地に、空き家、更地の点在となり、コミュニティが成立しなくなり、生活の利便性を

求め市域内の世帯移動が加速されることが生じるのではなかろうか。

このことを裏付けるものとして、住宅・土地統計調査を参照する。全国の住宅・統計調査は、総務省が5年毎に行っているが、その最新版である『平成20年住宅・土地統計調査（速報集計）結果の要約』（平成21年7月28日）によると、空き家数（756万戸）の総住宅数（5,759万戸）に占める割合は、13.1%と過去最高である。空き屋率は3大都市圏においては、12.1%（363万戸）であり、3大都市圏以外においては14.3%（392万戸）となり、地方の方が高い。3大都市圏の空き屋率12.1%は、5年前の平成15年の全国の12.2%とほぼおなじ割合である。また建てられる住宅タイプで増加が著しいものは、15階建て以上を含む高層である。

都市粗鬆症的現象に予防的に対処する新景観計画を早急に立てることが必要であり、それが都市総合計画全体の見直しを誘発し、その先導する役割を果たすと考えられる。本稿は、そのための具体的な第一歩である。

注

1. 辻村太郎、『景観地理学講話』，地人書館，1937
2. 武内和彦、『ランドスケープエコロジー』，朝倉書店，2006
3. ヤーコブ・フォン・ユクスキュル，ゲオルク・クリサート，「第一部 動物と人間の環境 世界への散歩」（日高敏隆，野田保之訳，『生物から見た世界』），思索社，1973，1988）
4. 沼田眞，『生態学方法論』，古今書院，1967
5. 藤井隆，『生物学序説』，岩波書店，1965，1971，145－146頁，Cannon，“Physiological Regulation of Normal Statics: Some Tentative Postulates Concerning Biological Homeostatics”，1926. Reprinted in L. L. Langley (ed.). Homeostasis: Origins of Concept (1973). 246, W. B. キヤノン，『からだの知恵—この不思議なはたらき—』，講談社，1981，1998，26－28頁
6. 沼田眞，『景相生態学—ランドスケープ・エコロジー入門』，朝倉書店，1996，1999
7. 三宅剛一，『経験的現実の哲学』，弘文堂，1980
8. オギュスタン・ベルク，『風土の日本—自然と文化の通態』，筑摩書房，1988，1990
9. イーファー・トゥアン，『トポフィリア：人間と環境』，せりか書房，1998
10. チゾルム，『知識の理論』，培風館，1970
11. 永井均，『ウィトゲンシュタイン入門』，筑摩書房，1995，2007
12. 谷口興紀，「『環境デザイン原理』について 北河内地域生活環境情報ネットワークノードに関する研究」，『北河内地域における生活環境と環境デザイン原理に関する研究』（産研叢書17）所収，大阪産業大学産業研究所，2002
13. 茂木健一郎，『脳とクオリア—なぜ脳に心が生まれるのか』，日経サイエンス社，1997

14. 谷口興紀,『地物の位置を定めることの地域計画論的意義 ―北河内地域における生活環境構成要素の定位による地域研究のために―』,大阪産業大学論集自然科学編 112号, 2003
15. 和辻哲郎,『風土：人間学的考察』,岩波文庫, 1979
16. 谷口興紀,『計画における意義行為と表示行為（その1）』,日本建築学会論文報告集第277号, 1978, 91-97頁。谷口興紀,『計画における意義行為と表示行為（その2）』,日本建築学会論文報告集第278号, 1979, 129-134頁
17. 榊原和彦,「第11章都市景観評価システム」(天野光三,『計量都市計画―都市計画システムの手法と応用―』,丸善株式会社, 1982)
18. 『おもいっきりイイ!!テレビ』2001年9月18日 富士山最遠望撮影成功が報じられた日
<http://www.ntv.co.jp/omoi-tv/today/080918.html>
(アクセス：2011/3/1)
『富士山最遠望写真』
<http://fyamap.folomy.jp/saien.htm>
(アクセス：2011/3/1)

[illegible]